

12. 研究方法論

1. 問題意識とは何か

研究または学問の出発点、問題意識、すなわち疑問である。問題意識のないところに、すなわち疑問のないところに、研究や学問は成立しない。したがって、研究や学問の表題は、疑問文に置き換えることができるものである。

たとえば、19世紀の社会科学分野の研究で後世に最も影響を及ぼした研究の一つにカール・マルクス（Karl Heinrich Marx, 1818年5月5日～1883年3月14日）の『資本論』（Das Kapital, 1866年～）という大著があるが、この大著の表題は、『資本とは何か』と言い換えることができるであろう。また同様に、20世紀の社会科学分野の研究で後世に最も影響を及ぼした研究の一つであるマックス・ヴェーバー（Max Weber, 1864年4月21日～1920年6月14日）の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（Die protestantische Ethik und der 'Geist' des Kapitalismus, 1904～1905年）の表題は、『プロテスタントのキリスト教精神が資本主義の発展に果たした役割は何か』あるいは『プロテスタントのキリスト教精神は資本主義の発展にとって重要なものであったか』と言い換えることができるであろう。もちろん、そのことが言えるのは、社会科学の分野だけではない。たとえば、物理学の分野で言えば、万有引力の法則を発見したニュートン（Sir Isaac Newton, 1643年1月4日～1727年3月31日）は、「リンゴはなぜ落ちるのか」という疑問からその研究を出発させたことはよく知られている。

疑問は、「なぜ？」というものだけではない。たとえば、私は、この文章を書くに当たり、マルクスの生没年はいつだったのか、とか、ヴェーバーの『プロ倫』のドイツ語の表題は何だったのか、などといったことを考え、調べてから、この文章を書いている。些細なことであるが、こうしたことが研究であり学問である。

私は、ロシアの法制史や政治制度史が専門であるので、いつ、どのようにして、ということがとくに気になるタイプである。たとえば、現在のロシア国旗である赤青白の三色旗は、ピョートル1世（大帝, Пётр I [Алексеевич], 1672年6月9日〔ユリウス暦5月30日〕～1725年2月8日〔ユリウス暦1月28日〕）の時代に商船旗として導入されたと言われているが、それは何年何月何日のことだったのか、どのような文書によって定められたのか（つまり勅令だったのか、法律のようなものだったのか、単なる発言だったのか）、三色の意味は何か定められていたのか、などの疑問が次々に浮かんでくる。もちろん、こうした疑問は、小さな疑問であり、多くの場合、調べてみれば答えが見つかるものである。もちろん、小さな疑問でも、なかなか答えが見つからないものも多いし、人によって異なる説明をしているものもあって、正解を見つけるのが容易でないものもある。たとえば、春学期の「ロシア・ユーラシア地域研究入門」で学んだ、1855年2月7日に日露間で最初の条約として締結された「日本國魯西亞國通好條約」（日露親善条約）の締結交渉の際のロシア側の全権代表がブチャーチン提督であったこと、そしてそのブチャーチン提督が乗船するロシア海軍軍艦パルラダ号が条約交渉中の1854年12月に東海沖で起きた地震による津波で大破し、最終的には沈没してしまったことはよく知られているが、この地震の名称と地震の起きた日付については諸説があり、著作によって違うことが書かれていたりする。

ごく最近、私は、日露関係史に関連するあるエッセイを書き、1891年4月27日（～5月19日まで滞在）にニコライ皇太子が来日した際に乗船していたロシア海軍軍艦の「アゾフ記念」（Память Азова）号の艦名の由来について初めて調べてみたのだが、この「アゾフ記念」号という艦名は、ギリシア独立戦争に際してギリシアのナヴァリノ湾でオスマン帝国艦隊と英仏露連合艦隊とのあいだで行われた1827年10月20日の「ナヴァリノの海戦」で活躍したロシア軍艦「アゾフ」（Азов）号の栄誉を称え、それにあやかって名付けられたものであることがわかった（Морской энциклопедический справочник, 1986）。従って、この「アゾフ記念」号を日本の複数の文献が「アゾフ」号と略記しているが、「アゾフ」号は別の軍艦の名称であるから、「アゾフ号」と略記すべきではないということがわかったのである。

しかし、これまで述べてきた疑問は、比較的小さな疑問であり、小さな問題意識である。しかし、問題意識といった少し大きな言葉を使う以上、そうした小さな疑問ではなく、もっと大きな疑問が研究や学問の出発点となるのではないかと思う人も多いと思う。もちろん、疑問には大きなものも、小さなものも、そして比較的容易に答えが見つかりそうなものも、反対に容易には答えが見つからなそうなものもある。上で述べた事例のように、比較的小さな疑問であっても、それを調べることは、それだけで立派な研究や学問（の一部）である。逆に言うと、大きな疑問、たとえば、「この世界ではなぜ戦争がなくなるのか」、「この世界にはなぜ貧富の差があるのか」といった疑問は、確かに容易には答えが見いだせないように思える。しかし、だからといって研究や学問のテーマにはなり得ないということはなく、それどころか、むしろこういった疑問が、まさに多くの学問や研究の出発点となっている。そもそも、私がロシアの法制史や政治制度史について興味を持ち始めたのも、その前段階に、かなり大きな問題意識があったからである。

私は、世の中の貧困・格差や差別などの、いわゆる社会問題を解決するためにはどのようにすればよいのかということが最初の問題意識だった。そしてその解決のためには、政治や行政のあり方が大きく関わっているのではないかと考えるに至った。そこで、た

たとえば、日本の政治や行政を考えた場合に、現在の政治や行政には改革が必要であると思うに至った。それと同時に、そのような問題意識の上に試みられた政治や行政の改革は、歴史上、あちこちの国で、古くから行われてきたことも知った。その成功や失敗の繰り返しの中で、日本ではたとえば明治維新や日清戦争に始まる戦争の時代があり、それはロシアでも同様であった。そうした改革の最も激烈な事例は、実は、ロシアや日本の近代化の歴史に見ることができるともわかった。そして、日本の改革を考える場合でも、日本と同様に、遅れた近代化を成し遂げていったロシアの事例が参考になるのではないかと考え、ロシアの法制史や政治制度史に興味を持ったのである。もちろん、その後、研究を続けていくうちに、異なる歴史や文化を持つ、ある特定の国や地域の経験を、別の国や地域に単純に当てはめようとする考え方は間違っただけのものであることに気づき、ロシアや日本の、あるいはそのほかの国や地域の、文化的・歴史的な固有性を前提とした上で、それらの国や地域の類似性と異質性を意識するようになった。その上で、ロシア語を学び、ロシアの歴史を学び、ロシアの法律を読み、ロシアの国家制度や地方制度がどうなっているのか、どのように機能しているのかを、なぜ、どのように、という小さな疑問を一つ一つ解き明かしていくという方法で研究してきたのである。

このように、疑問や問題意識には、大小はあっても、優劣があるわけではなく、大きな疑問は、それだけを考えていても容易には答えが見つからないことが多いので、小さな疑問に分けて考えていくという方法が必要であるということがわかる。たとえば、先に挙げた大きな疑問である「この世界ではなぜ戦争がなくならないのか」、「この世界にはなぜ貧富の差があるのか」といった疑問も、たとえば、ある一つの戦争に着目してその戦争の始まった原因を調べてみるとか、同じ地域に住む住民の間の格差がどのようにして生まれ、それが拡大していったのかを、ある特定の地域や時代を限って調べてみるとか、というように、より小さな疑問に分けて調べていくことで答えに近づいていくことができるのである。

2. 研究または学問とは何か

研究や学問は、問題意識から、すなわち疑問からスタートするということは、理解してもらえただろうか。では、疑問の答えが自分なりにわかった、納得できた、ということで研究や学問は終わってしまうものなのだろうか。

研究や学問は、実は、疑問の答えを他者と共有するということがあって、初めて研究や学問と言えるのである。自分で納得してそれで終わってしまったものは、研究や学問とは言えない。ニュートンの事例を思い出してほしい。ニュートンが、いろいろ調べた結果、リングが落ちる理由がわかり、納得できた、というところで終わってしまったら、人類は、第二のニュートンが登場するまで、万有引力の法則を知らないままということになっていたであろう。実は、ニュートンよりもずっと早く、万有引力の法則を発見した人がいたかも知れないが、私たちはその人を知らないし、万有引力を発見したのはニュートンだということになっている。それは、ニュートンが万有引力の法則を発見しただけでなく、それを発表して、他の人にわかるように説明し、他の人たちが納得したからである。つまり、研究や学問は、得られた答えが他者によって納得されて、共有されて、初めて研究とか学問とか、と言えるのである。ただ、自分で調べて学んでわかって納得、というので終わっては単なる自己満足にしか過ぎないということになる。もちろん、自分で調べて学んでわかって納得して、それで済ませたものも、その人が他者と関わる時に、その知識が役立てば、遠回しに他者に共有されたということにはなるかも知れないが。

しかし、直接的には、研究や学問は、その成果を説明できて、納得してもらえて、初めて確かなものとなったと言える。なぜなら、自己満足に終わっていて、他者に共有されなければ、それはいわゆる独りよがりであるかも知れないし、ひょっとしたら発表したら大笑いされるような大間違いなのかも知れないからである。

研究や学問は、他者と共有されて初めて成立するのである。この共有ということは重要である。多くの人に説明され多くの人がその説明に納得して、初めて共有されるということになるからである。しかし、だからといって、それが真実であるとは言えない。実は、真実というものは、相対的なものであって絶対的なものではないからである。たとえば、ガリレオ以前は、太陽や星が地球の周りを回っている、ということが真実であった。多くの人がその天文学の研究の成果の説明を納得して共有していたからである。しかし、ガリレオが登場して、実は、全く逆に、太陽の周りを地球が回っているという説明がなされ、多くの人がこんどはそれに納得したために、それが現在は真実ということになっている。ここからわかるのは、真実とは、多数決で決まるようなもの、つまり多くの人がそうだと納得していることにすぎない、ということなのだ。ここから言えることは、研究や学問の成果に対して、人は謙虚でなければならぬということであるし、またそれを絶対に正しいと考えてはならないということでもある。

とはいえ、多くの人を納得させることのできる研究や学問の成果の発表の方法は重要である。ロシア地域研究方法論という名前の授業で、パソコンの使い方や、わかりやすい文章の書き方、メディアリテラシーを学んだのも、実は、「研究の方法」は、文字通りの研究の方法、調査の方法だけでなく、成果の発表の方法、知識や情報の共有の方法でもあるからである。